

SSKA全国パーキンソン病友の会

創刊号

愛知県支部だより

発行人 八野健蔵 / 444-0103 幸田町大草字北前田 28-1 電話 0564-62-0088
編集人 加藤 登 / 452-0821 名古屋市西区上小田井1-341 電話 052-501-4470
郵便振替口座番号 00830-2-50411 加入者名 愛知県パーキンソン病友の会

会報の発行に当たって

会報担当副会長 加藤 登

会報担当の加藤です。パーキンソン病友の会愛知県支部の長年の懸案でありました会報を今回発行することが出来まして、心より喜んでおります。

第一号会報発行に当たり、「友の会」と「会報」の発展強化を目指すために、次のようなことを考えてみました。何卒ご賛同戴きまして、ご支援ご協力をお願いします。

会報は、先ず第一にパーキンソン病罹患者を勇気づける明るい紙面であることが必要です。第二に、必要な情報が一つでも多く記載されるものでなければなりません。

そして第三に多くの仲間の連帯を促す共通の話題が望ましいと思います。第四に会報として話題に富んだ自由な投稿も重要です。

これらの点を編集の柱として作業を進めますが、経費の都合もあり現在のところ写真の掲載ができません。その分カット等を挿入してバラエティに富んだものとしたと思います。この会報を通して同じパーキンソン病の人達の生活が活気に満ちた前向きなものになるような、そんな努力をしていく決意で御座います。役員始め会員の皆様のご支援を得て実り多きものに育て上げましょう。

【編集者からのお願い】

☆ 皆様の投稿をお待ちしております。ご不明な点は下記に問い合わせして下さい。

(事務局) 447-0031 東海市大田町上浜田 61-4-615 丹羽浩介 電話0562-32-4518

☆ SSKA全国パーキンソン病友の会 「愛知県支部だより」 本号は 創刊号で
且つ平成12年12月15日に発行するものです。

【創刊号の目次】

- ◇ 会報担当副会長・加藤 登氏に、会報への思い入れを書いて貰いました。 1 P
- ◇ 「友の会」の役員の方々に自己紹介を兼ねて、所感をかいてもらいました。夫れ夫れに個性が出ています。 3～8 P
- ◇ パーキンソン病の新しい治療法／朝日新聞記事の転載です 9 P
- ◇ 『パーキンソン手帳』の紹介です。 10～13 P
- ◇ 難病相談室のご案内 愛知県医師会 14～15 P
- ◇ 秋の一泊研修会の 模様を纏めました。 16～19 P
- ◇ お知らせ 編集後記 20 P



おのこころに
おのこころに
おのこころに
おのこころに
おのこころに

(絵は副会長 大石郁子さんの作品です)

発病して5年・入会して3年・会長就任3年目

会長・八野健蔵

序言 体調の異変に気づいたのは平成7年2月頃、キーボードを打つ手の指が思うに任せない。その後一年強、次から次にと今まで体験したことの無い奇妙な症状が出る。パーキンソン病症候群の診断が出たのは平成8年4月のことであった。病状が予想通り進行して、字が書けない、声が出ない、体は動かない、のいないづくしとなってしまった。こんなことでは仕方がない、4年間勤務した郵便局を定年まで6年残した59歳の時に退職した。その後の人生を考えて暗澹とした。

愛知県パーキンソン友の会に入会 平成9年5月全国総会が蒲郡市で開かれることを新聞で知り入会した。大会当日勇んで出掛けてみたものの、参加者数不足で流会大変な会に入会したと後悔したが後の祭り、この時に入会したことが今に繋がる。

平成10年4月県総会に出たら、いきなり今年から会長を引き受けて貰うときた。聞くところによると、現会長は体調不良という。止む無く受けたら幹事数不足の役員構成でスタートすることとなった。加えて何も分からぬまま、愛知県難病団体連合会副会長までお任せ付かった。然し、これは就任当初の事情であってお陰で多くの人達と知り合うことができた。又、私自身の励みとなった。感謝している。

手足に振戦が出た 薬の副作用が強いため医者にかかることを中断していたが今回は仕方がない、良い医者を探すこととした。平成10年5月のことであった。会の役員に相談してT病院K医師の紹介を受けた。マドパー、アーテン朝夕各一で振戦はぴたりと止まった。その後今日まで増量していない。但し、不眠症対策としてハルシオン錠、便秘にプルゼニドを服用している。

会長になって気づいたこと 各県から毎月2～3冊会報が送られてくる。製本内容共に素晴らしいものが有る。専門医による講演記録、闘病記、又或る県では毎年会の旅行を実施している、其の喜びの声がもろに聞こえてくる。愛知県もこのような行事がいつの日にか出来ればと夢がふくらむ。県下では会員の三分の一は寝たきり又は介護者が必要な人達である。この人達の思いは如何ばかりかと胸が痛む。

そうだ、愛知県も会報を出そう。幸いにして本年度副会長に就任された加藤さんが「やりましょう」と引き受けて頂いた。機運が盛り上がり今回の創刊号の発行の運びとなった。これからは、皆さんの会報として多くの意見や声を出して、この会報を育てていこうでは有りませんか。

【編集者から一言】 八野会長本人は止む無く就任と言っておりますが、なかなかどうして見識、統率力共に優れたリーダーシップを発揮されています。

発病を乗り越えて

副会長・加藤 登

会の副会長という要職を仰せつかっている加藤です。今の私の症状は、右手足の振戦が主症状で、最近は少し歩行に困難を感じずようになっていきます。さて、私がこの病気に気づいたのは、一九九四年頃です。地域の医療生活協同組合の組合員健診というのを毎年受診していて、その歳の健診の折、特に手が小さきみに振るえるのに気がつき、医師に「小学生にあるチック病のような症状だが」と言ったところ「病気の診断はこちらの仕事だ、神経内科の専門医に診てもらえ」と言われました。しばらくして、専門医の診察を受けたところ「これは間違いなくパーキンソン病だ」と言われました。パーキンソン病という聞き慣れない病名を告げられ、一瞬愕然としました。ちょうど頃を同じくして出版された岩波新書「神経内科」と言う本を手に入れ、読んでパーキンソン病についての大きな知識を得ました。しかし、どうして心身共に健康で、元気であることを誇りにしていたこのオレが、どうしてこんな病気になってしまったのかと、色々考え、一時引込み思案になり、外にでるのもいやになりました。然し、主治医から「パーキンソン病になったからといって特別な生活はしない方が良く今まで通りの生活をなささい」と言われ、夜の外出は殆どしなくなりましたが、家では晩も一日おきに楽しんでいます。

また、朝日新聞の記事により、全国パーキンソン病友の会があることを知り、一人でよくよしていてもしょうがない、同病の人々の経験等を聞いて自分なりに前向きな生活をしようと思い、会に入会したい旨伝えたところ、愛知県の会を紹介され、入会しました。発病してそう年数もたっていない、会員としても間がない、しかも比較的高齢の私が副会長というのは、おこがましい感じがしますが、私と同じような思いをしている同病の仲間がいるのではないかと、一人ぼっちであれやこれやと考えて、落ちこんでしまっている仲間が入るのではないかと思ひ、それなら仲間同士で話し合ったり、遊んだりすることによって、少しでも明るく、前向きに病気と付き合っ、余生を送ることができたらいいな、そういうことに少しでも寄与できればと思ひ、副会長という重職をお受けした次第です。

お医者さんの話だと、だんだん薬の効きが落ちてくるということですが、新しい薬の開発や科学的治療の前進もあると言われて今日この頃です。友の会の仲間の経験を聞きお医者さんの話を聞いて、少しでも病気の進行を遅らせ、もっと明るく人生が送れるよう頑張りたいと思っています。

友の会の会員の皆さんの一層のご支援、ご協力を心からお願いする次第です。

心のポケット

副会長・大石郁子

友の会の集いの度いつも感心してることがあります。車椅子で参加の方ですがとても素晴らしい笑顔の方がいます。ごく自然のほゝ笑、とかくこの病は表情が乏しくなりがちなのにさわやかです。私もこの方を見習いたいと思います。

パーキンソンになって七年目を迎えます。仲良く付き合っでは無くそろそろ卒業したい気分です。良き先生と良き友との出会いを戴きましてお蔭様でストレスがありません。今後はいかに心豊かに老いてゆけるか少し考えてみたいと思ふこの頃です。人は心のポケットにいろんな物を入れることが出来ますが、楽しく満たされた心で何人の方が過ごしているのでしょうか。発病当時は不安と恐れに心は正気を失い鬱状態の渦の中でもがいていましたが今は問いかけ語りかけができる様になりましたのでポケットの中味に磨きをかけたいと考えております。前を向いて歩くなら病気の方が去ってゆくと思ひます。何事もプラス思考で事に当たれば自分自身も楽ですから。外出先で私はよく付き添いの家族に間違われれますがこの頃はは脊椎にも問題が有り腰痛に悩まされて駄目です。町を歩くときウインドに自分の姿を見てギョッとします。パーキンソンそのものです。でもすましてまた背筋を伸ばして歩き始めます。

パーキンソンは軌道修正のサイン

副会長 久保田秀子

六十歳の前半頃から体調が崩れ出し、色々検査を受けても異状無しとの事で適当な治療も出来ず、悶々とした日を過しているうちに除々にパーキンソンの兆候が出て来て、やっと神経内科に伺いメネシット錠と出会わせていただきました。

おかげ様で薬の効いている間は大笑になり主婦業もぼつぼつ時間をかけて出来るようになりました。三年ほど前に「パーキンソン友の会」に入会させて戴き同じ病を抱えながら明るく前向きに生きておられる方達の姿勢に刺激され、勇気づけられました。そして私の心と体の痛みを本当に解ってくれるのは「友の会」の仲間しかいない、お互いの絆をもっと深め理解し合いたい、と願っていた折会報発行の段取りとなり本当にうれしく思っております。

人生の中で起こるどんな事柄もすべて約束されていることで偶然は決してない、との神理から考えるとき、人生の後半にきてこのような病に罹らざるを得ない詠を、過ぎて来た過去の中から見付だし軌道修正の旅を始めなければと思ひています。神はその人が越えられぬ試練はお与えにならぬとのこと、苦しくて、悲しくて、寂しい時、その痛みを分かち合いお互いに手を取り合っ励ましながら頑張っ生きて行きましょう。

我が友・パーキンソン

幹事・畔柳 鉄

パーキンソン病と診断されてから、ほぼ二十年になるが、病状の進行は至って遅いらしく、当初からの医師も進行がゆっくりしている希なケースだと感心している。医師が感心する程だから、特別な治療や秘薬がある訳ではない。この病では歩行には障害のある人が、比較的多い様だが、私は歩くことでは健常者並と自負して居る。

しかし歩行以外では、色々な症状がゆっくりではあるが、着実に進行している。衣服の着脱は、自力では次第に難しくなり、立ちくらみ、腰痛、幻覚、身体傾斜等、随分進行して来たと思う。平衡感覚も鈍くなり駅の階段から転げ落ちたり、自転車に乗って踏切を渡る際、ふらついて線路の上で転倒したり、橋の欄干にぶつかって、川に落ちそうになったり、ズボンをはく時よろめいて障子やガラスを破損したり、病状の進行に寄る失敗は枚挙に暇はない。失敗の大半は運動神経、平衡感覚、筋力の衰えによるものだが、自分の衰えは仲々認めがたいので同じ失敗を繰り返してやっと認めることになる。今では自転車は廃車し、ズボンは腰掛けてはくことにしている。健常者には全く問題にならぬ些細な事も出来ないのだと悟り、無理をせず、ストレスを貯めず、病気にブレーキをかけて、ゆっくり生きたいものである。



感謝の日々

幹事 丸山克彦

妻がパーキンソン氏病と診断されてから17年余りが経過し、入院生活も9年目に入った。この先いくつ病院を転院しなければならないのか不安におもうことは度々あった。以前から、役所を通して身障者への入所希望はしていた。数カ所の施設を紹介され訪問もした。入所面接も二施設受けたが断られた。(やはり病院しか…)

ところが、昨年八月、役所から「明日、杜の家という施設から面接があるけれど都合はどうですか。」無論、二つ返事で承諾。(今回もだめだろう)そんな思いが募った。一週間たって、入所出来そうだとのお知らせを受け、涙が溢れてとまらなかったことを今でも覚えている。

昨年十月、身体障害者療護施設「杜の家」へ入所することが出来た。入所して気分も安定し前向きになり、食事も「キサミ食」から「常食」になり、薬の良く効いている時は、本当にうまそうに食べている。そんな様子を見るにつけ、入所できほんとうに良かったと実感している。「パーキンソン友の会」には、平成六年森武一会長の時入会。名大医学部「鶴友会館」で総会が開催されていたことを思いだす。入所して間もなく「デイサービスもりの家」を利用している友の会の伊藤加津子さんに出会い友の会を手伝うことになった。お役に立てばと思っている。

共に歩んで

幹事・伊藤日出子

月日の経つのは早いもので、四十九でパーキンソンを発病して丸五年が経過し、五十二歳まで老人ホームの看護婦をしていました。この夏、医師より「進行しています」と診断されてショック。夏バテだと思っていたのに、そういえば、この三月焼き肉を喉に詰めて救急車で病院へ入院、窒息、又九月に入って、立位直後の第一歩が出ず転倒、両肘手首等、アザだらけ。又、また階段の最後の一步の足が上がらず、左膝を強打しボンボンに腫れて、数日間ビッコ。パーキンソンの薬を服用しているのに進行している。「何とかしなければ」ドンドン進行し、寝たきりになってしまう。しかし、苦しいのは、自分だけじゃない、夫も四十二歳で労災事故に遭い左半身不全マヒの身体障害三級、夫婦で障害者なんてお互いつらい毎日を送っていますが、これが現実で夢ではない。

今後も夫に手助けしてもらいながら、生きる事の重みをかみしめて、夫と共に歩んで行こうと思っています。



ある日ある時

幹事・奥田富美江

ある病院の神経内科の待合室で「奥さんはどこが悪いの」と聞いてくるおばあさんに、私は笑って「頭が悪いの」と応答しました。するとおばあさんはびりした顔をして「私も頭は悪いのだけれどネー」と口ごもりながら「まずい事を聞いてしまった」とでもいうような顔をして近くの席に腰掛けられました。

そうなんです。パーキンソン病は薬さえ飲んでいればある一定の時間は健康な人と同じように見えます。でも不思議なことに病名は同じでもみんな症状が違うのです。昨日は調子よく過ごせたのに今日は全く動けない状態の時もあります。

あの日以来私は病気と仲良く(その方法しかないもの)気分をリラックスさせ体調を整え、すべてを前向きに、重きを転じて軽く受ける生き方を心得たいと思う今日此のころです。共に頑張りましょうね。

原稿を読んでいて思わず吹き出しました。おばあさんとのやり取りは私も体験があります。奥田さん、あなたの生き方こそ、自然体です。きっと、病気の方が遠慮することでしょう。

自由を楽しむ

会長補佐・丹羽浩介

平成十二年八月、年度途中ではあるが八野会長の特別委嘱を受けて、友の会の仕事を手伝わせて戴くことになった。現在六十一歳、未だ少し体力に余力があるので何かのお役に立てばと思っている。

私がパーキンソン病と診断されたのは、会社勤めをしていた四十五歳の時である。あれから十六年、いろんな事があった。然し、今では極め付きの自由を満喫している。極め付きの自由、そう、それは心の自由のことである。もし私がパーキンソン病にならなければ、今ほどの快適な、そして伸び伸びしたこの生活は得られなかったに違いない。そういう意味で発病したこと事態それなりの意味があった。

心の自由、それは執着を離れ自分自身を受け入れることと思っている。次のように思う。「良く耳にする言葉だが、病気と闘うという。然し私は病気と闘わない。また共生するとも言うが、共生もしない。では何か。私は病気と一体なのである」と。人は日常生活において耳があることを意識しないで音を聞く、目があることを意識しないで物を見る。病気と一体とは、病気を意識しないで在りのまま受け入れて日暮らしすることと思っている。このように思えるようになって、心の自由を得ることが出来た。

朝日新聞 2000年10月26日 より次の記事を転記します。

パーキンソン病治療に役立つ細胞

マウス細胞からつくる 京大教授ら成功

からだの動きが制御できなくなる神経の病気パーキンソン病の治療に役立つ細胞を、あらゆる臓器や組織の細胞になる潜在能力があり「万能細胞」の異名を持つ胚性幹(E S)細胞からつくることに、笹井芳樹・京都大再生医学研究所教授らがマウスの実験で成功した。26日発行の米専門誌「ニューロン」に発表する。共同研究した共和発酵は特許を出願済み。損なわれた組織や臓器を人工的につくる再生医療の可能性を示す成果と言える。

パーキンソン病が脳の神経伝達物質ドーパミンの不足で起こることは、ノーベル医学賞を今年受けるA・カーソル博士らの研究でわかっている。脳に入るとドーパミンになる薬が治療に使われるが、長く続けると効果が弱まるなどの難点がある。欧米では中絶胎児の神経細胞を移植する治療も試みられているが、一人の治療に約十人分の中絶胎児が必要で、提供者不足や倫理面の問題がある。

笹井教授らは、大量に細胞を増やせるE S細胞に着目。マウスのE S細胞を骨髄等から採った細胞とともに培養すると、培養開始から八日程度で90%以上が神経細胞に分化し、うち30%がドーパミンを作る神経細胞になることがわかった。

これを人工的にパーキンソン病にしたマウスに移植すると、うち二割程度は二週間も生き残り、移植に成功したことを確認した。この方式を人の治療に使う場合は人のE S細胞から同様の細胞を作る必要がある。笹井教授は「サルのエ S細胞を使う実験を進め、人の治療に応用出来ることを示したい。世界の研究者が競争しているので、この方式は三年以内に、どこかで人の治療に使われるのではないかと話している。



パーキンソン病とは何か

以下に記載する事柄については、『パーキンソン手帳』 板倉徹著(和歌山県立大学神経外科教授)2000年5月初版 プレーン出版(定価800円+税)の許可をえて抜粋掲載するものです。この本の購入希望者は13 ページ下まで申し出て下さい、購入の斡旋をします。

パーキンソン病は1817年にイギリス人医師ジェームス・パーキンソンによって初めて報告された病気です。パーキンソン病は主に50歳以降に始まり、ゆっくり進行します。大部分の人では、非常にゆっくり進行しますが、その進行の速度は個人差が見られます。パーキンソンには次のような症状が見られます。

- ① 手足がふるえる
- ② 体の動きが遅くなる
- ③ 手足の筋肉がこわばる
- ④ 歩き方が遅くなる
- ⑤ 倒れやすくなる

等です。度の症状が強く見られるかはかなりの個人差があります。この病気は、手が震える、歩き方が遅くなるという症状で始まることが多く、また、最近元気がなくなった、声が小さくなったというような症状で気づかれる方もいます。

主な症状

①手足、あごなどがふるえる

動かずにじっとしているとふるえます(静止時振戦)。動作をする(例えば、物を取るなど)とふるえは止まります。



②体の動きが遅くなる



③手足の筋肉がこわばる

患者さんの手足を曲げるとガクガクとした抵抗が感じられます(歯車現象)。



④歩き方が遅くなる

歩き方が遅くなります。小さな歩幅で、すり足になったり、手もあまりふらなくなります。歩き始めの一步がなかなか出なくなる場合もあります。



⑤ちょっとしたことでバランスを崩してしまう

座ったり、立ったりするときにバランスをとるのが難しくなり、転びやすくなります。



◎自律神経症状

汗をかく、便秘、立ちくらみ

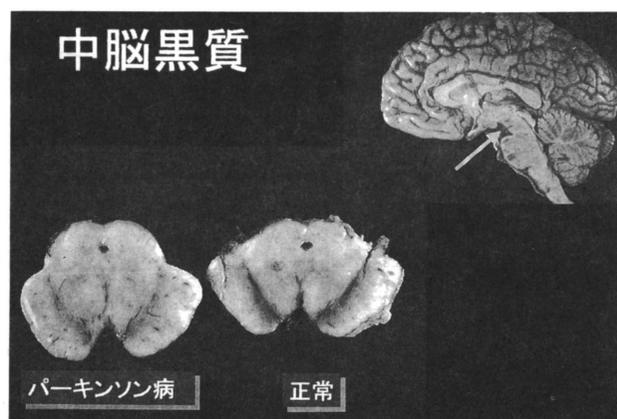


パーキンソン病はどこが悪いのか

パーキンソン病では、脳の黒質と呼ばれる部分のドーパミンを持った神経細胞がなくなり、この神経から分泌されるドーパミンが減少しています。

なぜこの神経がなくなるかは、今のところはっきりわかっていません。そのため、現在のところ完全に治すことができない病気です。

しかし、適切な治療を受けることによって、ほとんどの方が健康な方と同じ様な生活をできるようになります。医師をはじめとする医療スタッフ、また家族と協力しながら、根気よく治療していきましょう。

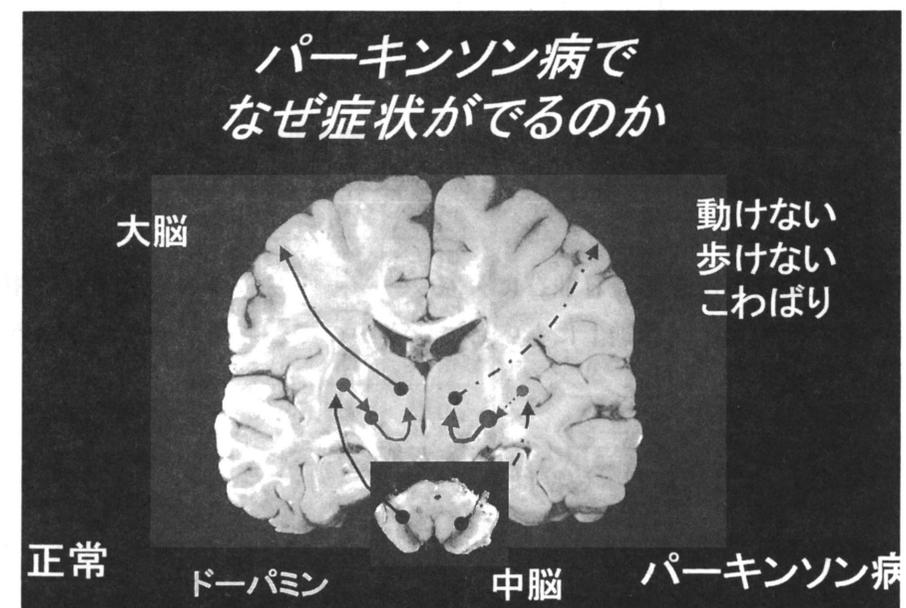


パーキンソン病はどこが悪いのか?

中脳黒質ドーパミン細胞は何をしているのでしょうか

中脳黒質にはドーパミン細胞が多数存在し、その線維は線条体に伸び、ここでドーパミンを放出して次の神経に情報を伝えます。
中脳黒質→線条体→淡蒼球→視床→大脳皮質
と神経の経路がつながっています。

中脳黒質の細胞がなくなると、この情報伝達はうまく行かなくなり、無動症、筋肉のこわばり、歩行障害や姿勢反射障害などのパーキンソン症状が出現します。



パーキンソン手帳 購入の申し込み先
〒444-0113 幸田町大草字北前田 28-1 ☎ 0564-62-0088
パーキンソン友の会・愛知県支部長 八野健蔵

難病相談室のご案内

病気が長期にわたったり、原因が不明、治療法が未確立というような疾患にお悩みの患者、家族の皆様へ、広くご利用いただくよう難病相談室を常設しております。治療や療養生活をはじめ、病気になったことで生ずる社会生活上の問題、例えば、経済的な心配や職場復帰、学校生活、家庭生活、人間関係等のご相談にも応じています。お困りの方には、どうぞお気軽にご紹介下さるよう申し上げます。

◇ 相談医師(専門医)による医療相談
指定日の午後2時～5時(予約制)

◇ 医療ソーシャルワーカーによる療養相談・生活相談
月曜日～金曜日 午前9時～午後4時

医療相談の「血液」疾患相談日並びに医療ソーシャルワーカーによる療養相談・生活相談では「エイズ相談」にも応じていますので、ご利用いただくようご案内申し上げます。

◇ 相談は無料 秘密は厳守します
尚、詳細は下記へお問い合わせ下さい。

愛知県医師会 難病相談室(1階)

〒460-0008 名古屋市中区栄4丁目14-28

☎ 052-241-4136 内線 211・212

愛知県医師会 難病相談室 相談医師日程表 平成13年1~3月

平成13年1月				3月			
日	曜	科目	医師	日	曜	科目	医師
9	火	血液	梶 内科 広田	1	木	消化器	欲 内科 楠神
10	水	腎臓	大幸 内科 清水	2	金	膠原	翻 内科 鳥飼
11	木	神経	第2日 神内 柳	5	月	神経	晒 神内 高城
12	金	膠原	保藤 内科 鳥飼	6	火	骨 関節	祐屋 整形 長屋
16	火	骨 関節	祐屋 整外 長屋	7	水	血液	梶祐屋 内科 山田
17	水	血管外科	翻井 外科 矢野	9	金	神経	柳 神内 柳原
18	木	消化器	欲 内科 楠神	13	火	眼	欲 眼科 鈴木
19	金	耳鼻	麩 耳鼻 瀧本	14	水	腎臓	翻井 内科 渡邊
24	水	神経	柳 神内 安藤	16	金	内分泌	麩 内科 富田
25	木	小児	欲 小児 渡邊	21	水	血管外科	翻井 外科 矢野
29	月	心身	柳 内科 早野	22	木	小児	欲 小児 森島
				23	金	耳鼻	麩 耳鼻 瀧本
2月				26	月	心身	柳 内科 早野
日	曜	科目	医師				
1	木	膠原	皮膚 大橋				
5	月	消化器	麩 内科 野田				
6	火	脳外科	欲 脳外 吉田				
7	水	骨 関節	麩 整外 丹羽				
8	木	呼吸器	内科 山本				
9	金	神経	柳 神内 村山				
13	火	耳鼻	麩 耳鼻 滝本				
15	木	神経	欲 神内 祖父江				
20	火	循環器	柳 内科 小川				
22	木	小児	柳 小児 石川				
23	金	眼	欲 眼科 鈴木				
26	月	心身	柳 心療 水野				

恒例秋の

一泊研修会開催

首題の秋の一泊研修会が、11月16～17日に掛けて、愛知県南知多 老人

福祉館 **ビラ・マリーン** で開かれました。

参加者ごうけい22人内医師2人 グループ討議に花が咲き、旧交が暖まり、友が出来、同じ仲間の連帯が生まれ育まれて行きました。

午後は、服部医師ご夫妻による講演と指導、両先生の心温まるご指導にただただ、感謝の心あるのみです。

夕食後の懇親では、カラオケに楽しむなど意義ある一時を過ごしました。

今年お出掛けの方は来年もぜひお出掛け下さい。

今年お休みの方は来年ぜひともお出掛け下さい



研修会参加者の声

落ち着いた会議室の中で服部先生のお話を聴くことができとても良かった。「パーキンソン病治療のガイドライン」については内容が難しく理解しにくい部分も部分もあったが、大変親しみのある話振りに好感が持てました。また優子先生の音楽療法は新しい治療分野かと思われませんが、声を発することは大変意味のあることだと思うし元気を出すことにもつながります。意義深い研修会でした。

丸山克彦

二日間皆様お疲れさまでした。出席が少しくなくて残念でしたが全員がまとまって今回はこれでよかったかなー。もっと遠慮せず積極的に意見を出して貰えるとよかつたように思いますが。楽しい思い出が出来てうれしく思います。自分の力で歩行出来るのも今しばらくのことと思いますが、こんな楽しい企画ならまたお願いしますね。

バス旅行なんかもいいかなー

伊藤日出子

自分自信の今後の介護が心配で勉強に来ました。会員の方とお話しが出来て参考になりました。『支部だより』の1号が発行されると聞きました。楽しみにしています。

A・Y

服部先生の話は全体として、新しい治療法の確立に向けてすすんでいるのだなァー、と言う印象を持つことが出来て心強く思いました。

然し、ここの内容は難しくとても理解することが出来ませんでした。

其れでも有り難う御座いました。また、会報『愛知県支部だより』が発行されると聞きました。この会が今後ますます良い会になるように頑張ってください。

中根真十郎

会長さんの勧めで初めて参加しました。同じ仲間の夫れ夫れの日とが頑張っているのを見て勇気が出て来ました。

市川光治

研修会参加者の声

当日のキャンセルもあって一泊 18 人、日帰り 2 名のこじんまりした研修会でしたが、とても暖かくて中身の濃いすてきな内容のものでした。服部先生の話は分かりやすく、副院長の優子先生の音楽療法では全員が大声を張りあげて、歌うことができました。来年の研修旅行も楽しみにしています。今年お会いした皆さん来年の顔合わせを楽しみに、今年おいでにならなかった皆さん、来年会いましょう。

奥田富美江

服部先生のお話しを分かりやすいと表現されたのは、奥田さんお一人です。あなたは普段から勉強されているか、頭脳明晰かいずれか、あるいは両方でしょう。編集者の私にはさっぱり理解できませんでした。優子先生すてき!!!

一泊研修会に出て楽しかった昔の心を戴きました。こんな喜びは最近ではいいことでした。同じ仲間の人がいっぱいいいて、心強くも、前向きな心もうれしさも、大切に持ち帰ります。来年もお願いします。

有田祥子

一泊二日の研修会、宿泊で味わうことの良さを感じました。普段着を脱いでゆかたに着替えたとき、お互いの胸襟が開きます。カラオケも将棋も心底から楽しめました。

研修講義の中のあの優しい優子先生のこれまた、なつかしさ一杯の音楽療法、しほみがちな我が人生、まさに清涼の一時でした。

野浪昭男

研修に参加して皆様が元気なのに感心しました。病状が進んでその結果手術を受けました。その結果好転して今回のこの一泊研修に参加することができました。思いもつかぬ良い結果を喜んで居ります。手術は都合 2 回受けましたが、2 回あわせて、結果よし、としておきます。何しろ一人でこんなすらしい会に出席できたのですから。音楽療法の優子先生、心が和みました。有り難う御座いました。

岡本 功

服部先生の熱心なるお話しに感銘を受けました。自分の飲んでいる薬の効用や副作用の見直しが出来て大助かりです。副院長の音楽療法は、大声で歌うことにより、すっかり童心にかえることが出来ました。あぁ、来て良かった。

久保田秀子

DIGEST

服部先生のお話し要点

DOCTORS SPEACH

優子先生、あなたの優しさと人間味溢れる人柄が、私共全員を魅了しました。なに、こんなことに驚くことはありません。達哉さんという方が最初にそれに気づいたのですから。

服部達哉医師 パーキンソン病の治療法には、①非薬物学的対応 と②薬物学的対応がある。前者はアメリカでは治療法が確立されており、ごく自然に応用されている。薬物学的対応が日本でも今日かなりの段階にまで到達しているから、今後の治療法として、①非薬物学的対応の研究応用が迫られる。

【聴聞者の声】医学上の話しは良く解りませんでした。しかし、患者の一人として、将来に向けて希望の持てる、心優しいお話しでした。

服部優子医師【聴聞者の声】音楽療法、聞き慣れぬ言葉でした。が、然し、大変に楽しい一でした。

- ① 声を出すことにより体内の換気と筋肉の活用を促進します。つまるところ、減入った気分を一掃して、前向きな爽快な気持ちになることです。
- ② 腹式呼吸をマスターして、手の指建てに三本入るように口を開け、大声でアーーー と大声をできるだけ長く出します。発声の準備が済んだら、好きな歌を身振り手振りを添えて唄いましょう。パーキンソンの気分はあなたの唄うその声と共に去ります。

(大声を出すときに近所の了解を得ましょう)

服部神経内科

院長 服部達哉 副院長 服部優子

本町クリニック

460-0008 名古屋市中区栄3-20-29

☎ 052-249-0101

FAX 052-249-0065

連絡 編集後記 メモ 何でも

☆ 友の会愛知県支部会報発行の具体的段取りに入ったのが、8月下旬のことでした。創刊号の発行ということで、年内に皆様のお手元に届けるのが至上命令でした。これができてホッとしております。此れ偏に、現行役員の皆さんの心が一つに成った賜物ですが、取り分け八野会長の熱意、加藤副会長の使命感がなければ達成することの出来ないことでした。

☆ また大石副会長には多々アドバイスを頂戴しました。挿絵もたくさん書いていただきましたが、採用させて戴いたのは2ページ一枚だけです。この一枚も経費節約の為簡便法で印刷しました。原絵の繊細さが損なわれて居ります。次回からの分をお楽しみ下さい。

☆ この会報の発行は、年3回、4、8、12月各15日発行を目標として努力して行きたいと思えます。初回はこのような形になりましたが、形式内容に拘るものではありません。目指さすところは唯一つ。会員の皆様のお役に立つことだけです。この原点さえ踏み外さなければ、他の事柄に付いては妥協もし、努力もし、歩き回ることも厭わず、経費の捻出についても会長のご指示について行く所存です。(回りくどい言い方をしました。若しご協力して戴くところが在りましたら、広告の掲載を検討しているということです)

☆ ミスプリントはお許してください。この会報は印字、校正を一人で行っています。それは、時間と経費、能率との関係です。一人校正と言うものは、なかなか厄介なのですが、当面此れで行かさせて戴きます。皆様の知恵とご支援の態勢が整い次第、そのようにして行きたいと思えます。

第2号に向けて、意見、投稿、旅行記、体験記、闘病記、趣味、短歌、俳句、川柳、短短私小説、パーキンソン情報、世相切斷、一寸した良い話、私の青春時代(良かったわ)、菊を育てる、金魚を飼う、等。要するに何でも構いません。原稿をお待ちして居ります。字数用紙はお手元に在るものをお使い下さい。投稿宛て先は1ページ下段の所まで。